

- 池遺跡 第II分冊], 155-159. 帝都高速度交通営団, 東京.
- 辻 誠一郎・南木睦彦・小池裕子. 1983. 縄文時代以降の植生変化と農耕—村田川流域を例として—. 第四紀研究 22: 251-266.
- 辻 誠一郎・南木睦彦・小杉正人. 1986. 館林の池沼群と環境の変遷史. 「文化財総合調査 茂林寺沼及び低地湿原調査報告書 第2集」, 7-110. 館林市教育委員会, 館林.
- 辻本裕也. 1995. 植物化石からみた古植生・古環境. 「高島平北」, 49-106. 都立学校遺跡調査会, 東京.
- 植田弥生. 2002a. 樹種. 「池上本門寺近世大名墓所の調査」, 225-239. 池上本門寺奉賛会, 東京.
- 植田弥生. 2002b. IV 面墓出土木製品の樹種同定. 「桑名城下町遺跡発掘調査報告書 萱町 93 (法盛寺) 地点」, 46-56. 桑名市教育委員会, 桑名.
- 植田弥生. 2003. 東京駅八重洲北口遺跡出土木キリシタン墓木棺の樹種同定. 「東京都千代田区八重洲北口遺跡」, 799-801. 千代田区東京駅八重洲北口遺跡調査会, 東京.
- 吉川昌伸. 1997. 溜池遺跡の花粉化石群. 「溜池遺跡 第II分冊」, 83-117. 帝都高速度交通営団, 東京.
(2004年5月26日受理)

書評: アーネスト・ギフォード・エイドリアン・フォスター (長谷部光泰・鈴木 武・植田邦彦, 監訳). 2002. 維管束植物の形態と進化. 原著第3版. 643 pp. ISBN 4-8299-2160-9. 文一総合出版, 東京. 価格 9240 円 (税込)

日本は書に恵まれた国である。世界でもこれだけ多種多様な翻訳書が刊行されている国はそう見当たらないのではないだろうか。本書は、そのような環境の中でさえ、よく出版に踏み切ったといえるような、おそらく出版社にとっては大変な決断を迫られたであろう書である。もちろん、この英断は大いに評価すべきものとなった。

本書は、永く植物形態学のバイブルとしてひもとかれてきた英語版の名著, *Morphology and Evolution of Vascular Plants* (E. M. Gifford & A. S. Foster. 1989. Freeman and Company, New York) 第3版の完全日本語訳である。初版の Foster & Gifford. 1959. *Comparative Morphology of Vascular Plants* (維管束植物の比較形態学) 以来, K. Esau の *Anatomy of Vascular Plants* (2nd ed., 1977. Wiley, New York) や D. W. Bierhorst の *Morphology of Vascular Plants* (1971. Macmillan, New York) などとあわせて、20世紀後半の植物形態学者必携の書であった。解剖図を含む豊富な図版を駆使して、維管束植物の進化史に即しながら、大分類群から小さな分類群へと段階的に書き進められており、維管束植物とはどのような生物たちから成り立っているのか、その形態と進化がどこまで明らかにされているのかが、とても分かりやすくまとめられている。第2版までは、表題に「進化」はなかった。表題の変化は、形態学が進化研究に不可欠であること、その生物学的な面白さを訴える時代になったことの象徴でもある。第2版(1974)と大きく異なることは、分子系統解析にまつわる話題が随所に盛り込まれていることである。分子情報の急速な集積が、形態と進化研究にどう反映されるのかを、生物学の重要な変換点であった20世紀末の時点で解説することには十分な意義があった。

生物の進化は、分子情報をほぼ自在に扱うことができるようになりはじめた1980年代後半までは、主に形態学に基づいてその解明がはかられてきた。形こそが、生物の歴史と生き様を明らかにするための原初情報で、有力な手が

かりの一つだからである。このことは、形態進化と遺伝子進化とを結びつけて議論することが可能になった現在でも基本的に受け継がれている理念である。解剖学を知らなければ医者ができないのと同じように、形態学は多くの生物学者にとっての素養である。にもかかわらず、形態学を高等研究機関で教育することは、非常に難しくなりつつある。従来は形態学だけでは、大学などの研究室を確保することは難しい。この点を補うには、形態学の素養を身につけた、先端分野の研究者を養成するか、生物学を志向する学生が、自主的に素養を身につけるしかない。欧米でも事情は似てきているが、本書のような良書が改訂され続けて出版されていることは、形態学教育が彼の地ではまだ軽視されていない現れでもある。だからこそ、情報が急速に入れ替わる現代においてさえ、原著の出版から13年経てもなお本書が訳出されるべき意義があったのである。

本書の果敢なる訳者たちは、先に挙げた「素養を身につけた先端分野の研究者」である。将来の植物学(あるいは生物学)の展開を見据えながら、ときには訳出に苦勞する形態学の用語にも注意をはらいつつ、日本語版を上梓している。このため巻末には、訳者注のほか、訳出時における維管束植物の系統図(もちろん分子情報、化石情報を加味してある)や、日本語で読める本も含めた参考図書などが添えられており、この分野の理解をできるだけ広めたいという親切な意思がうかがえる。

第1章は、まず植物形態学を科学的に位置づけることから始まる。ここで触れられているように、本書では化石記録を非常に重視している。全体を通じて、化石植物と絶滅分類群の記述に著者が多くのページを割いていることは、決して評者の身びいきではなく、本書の内容を際立たせており、形態と進化を広い視野で理解してもらうのに大いに役立っている。第2章以降の各分類群の記述では、形態、生殖、発生という定番の記述だけでなく、必要に応じて研究史や、生態、分類地理、分子、さまざまな問題点などにも触れら

れており、単なる知識をひもとくような百科事典としての教科書ではなく、読み進むことでさまざまに考えを巡らすことのできる本として書かれている。植物だけでなく、生物の形態進化に興味のある人には是非眼を通していただきたい。

形態学の基礎教育は、実は小中学校から始まっている。生き物を見たり触ったりすることは、形態学の始まりである。先に憂慮した素養としての形態学の欠落は、初等教育あるいはそれ以前に子供と自然とのふれあいが欠如しつつあるという重大な問題も包含している。中学や高校の教科書では実際に、植物の構造を学習するが、教育する先生も知識や経験の不足に直面している。多くの形態学の教科書が、形態の記述を詳細に行ってきたことはそれなりに評価できるが、形態学を生物学の一分野としてどう捉えるのかを伝えることにはあまり成功していない。本書はこの点で、教育者には、必要な情報だけでなく、多くの示唆を与えてくれる好著である。高価であることは否めないが、少なくとも植物の形態や進化にふれる必要のある先生方には、どこかで手に取ることのできる書であって欲しい。植生史研

究に携わる研究者、あるいはさまざまな植物遺体に遺跡等で遭遇する人たちにとっても、同様に便利かつ示唆に富む本である。植物の形から何がわかるのか、出土した遺体にどのような生物学的な意味があるのか、植生史研究も多様な視点が実のある成果をもたらすという点で、どの科学とも同じである。そのための素養の源として、本書は重たいけれども奥の深い存在である。

原著第2版のカバーは、石炭紀のシダ種子類メデュローサの堂々たる復元図であった。訳出の原著第3版は、さえないヨーロッパのキンボウゲ科の浅いレリーフで、この点はとても残念であった。日本語版の表紙にはレリーフはないが、カバーには複数の植物たちのカラー写真が組まれている。それぞれが、形態と進化という視点だけでなく、生物学的に多くの問題と興味をはらんでいる。本書がそのような生物群の理解の到達点を単に記述しているのではなく、今後の発展のために世に出されているのだという訳者たちの主張がうかがわれる美しい選択でもある。

(西田治文)

書評：沖津 進. 2002. 北方植生の生態学. 212 pp. ISBN 4-7722-7003-5. 価格 3360 円 (税込). 古今書院, 東京.

極東ロシアは、日本列島と植物地理学的に接しており、日本の植物相や植生を研究する上で重要な位置にあるが、近年まで日本人研究者が立ち入ることができなかった。ウラジオストクが外国人に開放された1992年以降、著者はほぼ毎年極東ロシアを訪れ、ロシア人研究者の野外調査に同伴してフィールドワークを続けてきた。本書の内容は、著者の極東ロシア地域の植生研究の集大成であり、東北アジア全体の植生を見渡した上での日本列島の北方植生とその植生史についての考察である。すなわち、第1部「極東ロシアの植生景観」では、シホテーアリニ山脈の植生、サハリンの森林、マガダン州のグイマツ-ハイマツ林の分布、カムチャッカ半島中部の森林限界付近の植生、北千島パラムシル島エベコ山の植生を紹介した上で、極東ロシアにおける森林の分布と境界決定機構を考察している。第2部「極東ロシアからみた北海道の植生地理学」では、北海道の針広混交林の植生地理学的位置づけと成立機構、エゾマツ-トドマツ林の植生地理学的位置づけと成立機構、大雪山上部に分布する植物群落の植生地理学的位置づけ、極東ロシアの植生からみた最終氷期以来の北海道における植生変遷が議論されている。本書に含まれている情報量は非常に多いが、たくさんの植生景観の写真と簡潔な図を使ってわかりやすく解説されている。植物の学名には命名者が省略されずに記述されていること、巻末に和名と学名の対照表

がつけられていること、ロシア語の文献は本文、引用文献リストともキリル文字の原語で記述されていることは、無用の混乱をさけるために非常に重要な点で、参考になる。

本書がとりあげるフィールドには、シホテーアリニ山脈北部のアニュー川地域のように、これまでロシア国内でもまとまった調査報告がされていない植生研究の処女地が含まれている。このような地域は広大な自然植生が残されている一方で、そこでのフィールドワークには困難と危険が伴う。ライフル銃を携帯しての植生調査風景や、蚊の猛攻と格闘しながら標本作成用の新聞紙を1枚1枚、たき火で乾燥させるロシア人研究者の姿を写した写真が調査時の苦勞を物語っている。本書のおわりでは、現在の日本では少数派になってしまった「野帳一冊、折れ尺一本」による自然科学調査の重要性を唱えている。そこでは、ロシア人研究者の、キャンプ生活を含めた野外での生活力の強さに脱帽し、日本の大学でも野外生活力を養成するカリキュラムが必要だと述べている。その調査姿勢を反映してか、本書には最初から最後まで緊張感がみなぎっている。「はじめに」には、本書の内容と目的、意義をしっかりと記述してあることや、全体的に無駄な記載がないこともその一例である。海外野外調査のノウハウをもっと記述してほしかったところもあるが、その情報については、酒席を設けて著者に直接聞いてほしい。

(百原 新)